

## 解 答



問一 ① ウ ④ ア 問二 イ 問三 ウ 問四 イ

問五 雨が降って木が湿っているから、煙草の火で火事になる心配はないのではないかという疑問を述べたから。

問六 d 問七 エ

問八 ぬかるみというものの存在自体を知らないということ。

問九 ウ 問十 ア B イ B ウ A エ B



問一 ① ア ③ ウ

問二 A 一連の動作と、終わった後の雰囲気まで感じるニュアンスを表す。

B 連続する動きが今まきに行われているというニュアンスを表す。

問三 イ・エ 問四 ぶらつく 問五 ウ 問六 イ 問七 ア

問八 オノマトペを体系や法則にまとめよう〔とすること〕

問九 個々のオノマトペが実際に使われる場面やニュアンスから切りはなされてしまったこと。



① 挙手 ② 要領 ③ 往路 ④ 童心

## 解 説



出典は、堀江敏幸『トンネルのおじさん』。

問二 「おずおずと」は、こわがる気持ちや気兼ねする気持ちがあって、ためらいがちに何かをするときの様子。少年は夏休みに入ってからおじさん夫婦の家に預けられたこと、おじさんと「一対一で向き合うのは今日がはじめてだった」ことなどから、おじさん夫婦にまだ遠慮する気持ちがあったこと、それでも「ツナのおにぎりが大好物だった」ので気がかりで聞かないではいられなかったことなどがわかる。

問三 おじさんが少年に対して使った「坊主」は、からかいや親しみの気持ちをこめて人、特に男の子を呼ぶときの言葉で、「わんぱく坊主」「三日坊主」も同じ。ア・イ・エの「坊主」は髪の毛のないつるつる頭のこと。

問四 ——線部③の直後の「そのたびに故郷の柿の木の話」から、同じ段落の最後の「言葉はとめどなく流れた」までをよく読み、柿の木のある故郷で過した子ども時代をなつかしく思い出している母の気持ちをおさえること。

問五 「雨が降って木は湿っているよ」という少年の言葉に感心したのであるから、その言葉の意味するところを考えること。「(煙草の火を)だいじにもみ消す。火事がいちばん怖い」というおじさんの言葉を、「でも」という逆接の言葉で受けて、「雨が降って……」と言っていることから、少年は、「雨が降って木が湿っているから、煙草の火で火事になることはないのではないか」という意味のことを言おうとしているのだとわかり、そのようなことに少年が気づいていることに感心したのである。物が燃えるためには燃える物と酸素と発火点以上の温度の三つが必要であるが、木が湿っていると煙草の火のような小さな火では発火点以上の温度にはならないのである。

問六 (d)は「モノ」と言い換えられるが、他は「ガ」という意味である。

問七 「いまどき……どんな想像力のある子どもでも考えつかない」と言っているように、おばさんは工作に木の根っこを使うことを考えつかない理由を「想像力」の問題にしている。「木の根」と「想像力」について述べている選択肢は、「地下にある木の根は見過ごされがち」だというエ。アは「都会の子にとって」が不適切。都会の子に限らず、「いまどき」の子は思いつかないのである。また、ウのような事実は書かれていないし、本当にそうなのかそうでないのかもわからないこと。

問八 都會育ちの少年に「ぬかるみという単語はない」のは、彼らが「ぬかるみ」というものがどういうものかも、さらにはそのようなものの存在すら知らないということ。見たり体験したりしたことのないものでも、そのようなものが存在しているとわかれば言葉としては知っているということがあるが、それさえもないのである。

問九 母親にさせてもらった体験は潮干狩りのことしか書かれていないので、アの「様々な体験」は本文と合わないし、その潮干狩りも父親を含めた三人で行ったのなら幸せだろうが、「ふたりで行った」のは父親がいないからなので「心の底からうらやましく思っている」というのは不適切。同じ理由で、「海」の話をするのは、イのような「明るい話題に変える」ということにはならない。海に潮干狩りに行ったり山に木の根を掘りに行ったりすることは決して「贅沢な」こととはいえないが、そのようなおおげさな言い方をすることで、父親が家に戻らないという家庭の問題を抱えた少年の心を少しでも軽くしてやろうとしているのである。

問十 アは「父親のいない寂しさを忘れることができた」が、イは「かたくなだったおじさんの心」が本文と合わない。  
また、木の根がある場所にたどりつくのに、大変な苦勞をし困難を克服してたどりついたわけではないし、木の根にたどりついたことに少年が大きな喜びを感じているわけでもないので、エの「少年の明るい将来の暗示」というとらえ方は適切ではない。

㊦ 出典は、小野正弘『オノマトペがあるから日本語は楽しい』。

問二 「パラリ」と「パラパラ」についてまとめている部分から、「パラリ」「パラパラ」だけでなく「リ」をつけたりや『もと』の繰り返し」をしたりするさまざまな場合にあってはまる内容を抜き出してまとめるようにする。「リ」については「ページをめくる一連の動作と、めくり終わった後の、なにか落ち着いた雰囲気までも感じ」ると、「『もと』の繰り返し」については、「ページをめくるときの、連続する動きが出てくる」「今まさに続いているすがたを表している」とまとめていることを読み取る。\_\_\_\_\_線部がさまざまな場合にあってはまる言葉になる。答えの終わりは、並列されている他の二つの例と同様に、「～ニュアンスを表す。」とすること。

問三 ②の「心の声」の内容は、その前に述べられている「豊かなニュアンス」を伝えるもの、⑤は同じくその前に書かれている「自分の心にどう迫ってくるか」ということを表したものである。

問五 「むかつく」のような「肉体感覚的な表現」に対して「わからず屋になる」のは、アのような「日本語の表現力を磨く」ためではなく、理路整然と理屈で説明してもらい、そこに理があるかどうか判断するためである。だから、「そんな言い方では納得できない。理屈で説明して欲しい」ということになるのである。また、筆者が問題にしているのは、「言い方」「言葉」であって、イのような「なんとなく同調する」態度や、エのような「自己中心的な感情」ではない。

問六 直前に「もしそうだとすれば」とあるのだから、「そう」が指していることが「オノマトペこそは、名前のもとである」ことの理由になる。「そう」は直前の「それが自分の心に……心の声なのである」を指しているので、それに合うのはイ。

問七 オノマトペは「肉体感覚的な表現」「心の声」なので、「理屈ではなくわかってしまえる」面がある一方、そうであるからこそ『ぎらぎら』を使わないで『ぎらぎら光る』と同じ意味のことを伝えるのは、至難の業である」ように、他の言葉で置き換えたり説明したりするのが難しい言葉なのである。

問八 蝶をある基準に従って整理し分類することをオノマトペにあてはめれば、どのようにすることのたとえになるかがす。「体系的にととのったかたちで説明する」と「オノマトペを体系や法則にまとめよう」が見つかるが、「とすること」につながるのは後者。

問九 蝶がもはや飛ばなくなってしまうのは、生きた蝶ではないから。それをオノマトペにあてはめれば、死んだ言葉、つまり、言語生活の中でそれぞれのオノマトペを使うのにふさわしい場面で、ふさわしいニュアンスをこめて使われているものではなくなくなってしまうということ。